

て5月2日には最後の列車として日本観測隊長である先生自身を乗せた急行が矢張10時45分出発したのであった(観測隊はアメリカからも参加した)。先生をお見送りしながら、これまでに漕ぎつけた先生の御苦労を思った。GHQ(総司令部)との交渉は観測器械のLST(上陸用舟艇)による輸送をも含めてほんとうに大変な仕事だったのである。

日食についてはもう一つの思い出がある。昭和33年10月12日の皆既日食は南太平洋でおこり、そのために観測隊の輸送が必要であった。それに適当な船がないのである。先生はそれに大へん苦労された。いろいろと交渉された結果、北大の水産学部の練習船“おしよ丸”(590トン)に内定した。先生の命を受けて、私は最後の交渉に札幌へ出かけた時は、ほんとうにホッとした気持であった。しかし先生も私もおしよ丸が観測隊を乗せて観測地であるスワロフ島に向い、又終って芝浦に無事戻ってくるまでは気が気ではなかった。

天文学研連で提出をきめた74吋反射望遠鏡設置の件も先生の並々ならぬ努力とねばり強さが遺憾なく発揮されたものといえよう。その結果は岡山天体物理観測所となって立派に完成し、現在までに多くの業績があげられていることは周知の事実である。

先生の天体力学への顕著な貢献に対し先生の傘寿(80才)を祝して昨年5月23日から26日まで東京で開かれた国際天文学連合シンポジウム No. 81 “太陽系の力学”で講演された“天体力学の現況”(Present Status of Celestial Mechanics)という主題の先生の英文の原稿を見ながら、私は半世紀以上日本の天文学界の輝ける巨星であった先生を失った深い悲しみに打ちひしがれている。しかし私たちは先生の遺業を受けついで何とか未来への希望をつながなければならぬ。そして天文学への何らかの寄与をすることができたなら、天上にある先生の御心も安らぐであろう。

萩原雄祐先生を悼む

海野和三郎

萩原先生は1月29日朝全く突然天国へ旅立たれてしまった。私も偶然同行したが、理学部3号館の階段を談笑しながら上って行かれたのはついその2、3日前のことであった。そのときは、お元氣な声を聞きつけて、本木さんがうれしそうに階段のところまでお出迎えしたほどであった。先生の生涯は最後まで天文学のために修羅をもやした壮烈なものであったといえる。

先生の功績は、天体力学および天体物理学の理論的研究、後進の教育指導、東京天文台を中心とした本格的な観測施設の建設である。そのいずれに最も貢献が大きいかは人によって評価がちがうが、これらすべてに比類ない大きな足跡を残されたことは万人の等しく認めるところであろう。わが国の天文学が世界的なレベルに達し得たのは先生の御努力によるところ絶大である。

戦時中火災にあった東京天文台で、敗戦の沈滞を打破り、それこそ八面六臂の活躍で復興をなし遂げたのは先生であった。そのためには、戦争には敗けたが学問では敗けなかったという先生の自信がものをいった。惑星状星雲の研究は、畑中さんらの協力もあったが、メンゼルなどの研究に対し遜色のないものであった。また、惑星状星雲内の電子速度分布の歴大な研究は野心的な基礎研究であり、解析的な方法は先生の実力の一端を示すものであった。惜しいことに、見込みちがいがあり、結果はあまり面白くならなかったが、今にして思えば、銀河系の恒星速度分布にでも適用していればよい結果が出たこ

とであろうと惜しまれる。いずれにしても、わが国に本格的な天体物理学を植えつけたのは萩原先生であり、それにつづいてわが国の天体物理学の基礎がかたまってきたものと私は考えている。

先生はその知識欲と理解力で天才であった。万卷の書と論文を読みこなし、数学と物理学の先端にも通じておられた。著名な外国の天文学者も、先生からみると、こんなことも知らないということになった。これは先生の長所でもあり欠点でもあった。その学識からくる自信と知名度とプラスアルファを先生は天文台の復興にことごとく利用した。先生は、日本は欧米とかなえの三脚であると唱えた。御前講義にも職を賭してそのようなことを直訴したというのが先生の御自慢であった。一寸、時代がかっている気はしたが、とにかくその迫力で、乗鞍コロナ観測所、岡山の74インチ、堂平観測所などを獲得した。近年完成した木曾のシュミット望遠鏡なども当初からの計画の延長である。これだけのワンマン的活躍のできる人は今後再びあらわれることはないように思われる。

私が天文学科に入学したのは昭和19年10月、戦況も次第に不利になりつつある頃であった。先生は戦時研究としてマグネトロンの研究をされたのもその頃であったであろう。マグネトロンの発信機構をヒルの方程式で論じた先生の論文がある。中期(2年生)となって、石田、大脇などの諸君と共に私も萩原先生の講義を聞くように

なった。いよいよ本格的に天文の学生になった気がして大いに興奮したものである。当時は、天文学教室は麻布の狸穴にあったが、空襲を避けて教室が諏訪へ移る少し前に、私どもは先生の天体力学と軌道論の集中講義を受けた。いつ空襲で死ぬかもしれないから、その前に教えるといわれて、朝から晩まで連日の物凄い講義であった。先生は例の風呂敷を開いてすり切れた大型封筒につまんだ原稿を取り出して、早口でしゃべりながら黒板に読みにくい字で式を猛烈な速さで書きなぐっていくのが常であった。私どもは啞然としてノートをとるのが精一杯であった。夕暮が迫り1日の講義が終ると頭は完全に思考能力を失って失神状態におちいったことを覚えている。それ以後、私たちはどんなにわからない講義を聞いても全然動じないことを身につけた。また細かいことはわからなくても大よその概念を推察する術も覚えたような気がする。とにかく内容は豊富であった。1つの論文は平均10分から20分くらいの講義時間で片づけられたように思われる。このような講義は敗戦後本郷に移ってからも続けられた。おびただしい概念と方法がその中に含まれていた。先生の「天体力学」の名著をひろげれば、その一端が知れるであろう。決して名講義とはいえないが、あのような講義のできる人は今後再びあらわ

れないであろう。

先生は、あれほど偉い人でありながら変にコンプレックスのかたまりのようなところがあった。自信を持ちながら、一方では人がどう思っているか気にする風であった。文学青年じみた青臭い面も持って居られ、そうした文章も書かれた。私は先生のそうした面には一切おつき合いしなかったが、弟子として甚だ非人間的であったと後悔している。

年をとられてからもその頭脳は少しもおとろえず、最近素粒子、原子核を勉強して居られた。天体力学の名著を脱稿されてから、岩波全書の「天文学」の改訂をされた。私も、多くの人の助力を受けてようやくその改訂版を出すおついでをすることができた。これは、以前から先生が心残りにしておられたことの1つであったので、私としても肩の荷をおろす思いであった。この本も先生の特徴の一端を伝える奇書である。

先生は何しろけたはずれの人であったので逸話は多い。しかし、私にはそれを書く文才はない。私は、ただこの世紀の巨人が去った後のすき間の大きさを感じて、御冥福を祈るのみである。天国で、愛弟子であった畑中さんと天文学を語り、後進のためにわが国の天文学の行方をいつまでも照らして下さいよう先生にお願いしたい。

萩原先生のこと

古 在 由 秀

昭和54年1月29日、萩原雄祐先生が亡くなった。萩原先生は昭和21年の秋から32年まで、10年以上にわたって東京天文台長をつとめ、第二次世界大戦後の非常に困難な時代に、東京天文台の研究水準の向上に努力されたことは誰でも知っている。岡山天体物理観測所の口径188cmと91cmの望遠鏡や、乗鞍コロナ観測所、太陽電波観測用の10mのパラボラアンテナなどはいずれも先生の台長時代に実現したものであり、その後完成した諸施設も、先生の構想によるところが多い。また、何よりも天文学の研究のための職の拡大にもつとめ、台長就任時には、技師11名、技手19名、合計32名であった東京天文台の定員も、昭和32年には、教授、助教授各5名、講師級12名、助手9名、技官49名、合計128名と4倍になっている。「俺が台長をやっていないぞ」とよく先生にいわれたが、この数字を見ればそれもたしかである。

先生の東京天文台長時代の業績もさることながら、筆者にとって忘れられないのは先生の講義であり、その著書である。もともと、筆者も先生が天文学者になっておられなければ、天文学で職をえていないだけでなく、大

学で天文学科にも入っていなかったであろう。先生の「天体力学の基礎」第一巻(上)が出版されたのは筆者が旧制高校3年の秋であり、これを読んで天体力学を勉強したいと思いついた。また、同じ頃に、筆者は東京大学の各学部の授業の時間割りを見てまわった。理学部でも、他の学科は、何々論とか何々概論とかいう無味乾燥な授業の題目しかなかったのに対し、天文では、「3体問題の位相数学」とか「希薄天体の量子物理学」といったような題目がみられ、これらが戦中戦後に学問にうえていた筆者にはとても新鮮に思えたのである。これらが、先生の天文学特別講義であった。

こういうことで、「天文では飯はくえないぞ」と言われたにもかかわらず、天文に進む決心をしたので、卒業後のことはともかく、大学では気に入る授業に出たいということしか考えていなかった。

入学式の日、先生が、「大学の授業は皆の学問のための触媒にしかすぎない」と云われたことを今でも覚えている。ところが、その触媒たるや、我々のなかの化学反応物質よりはるかに大量であり、反応物質の方がおしつぶされてしまいそうである。ともかく、先生は週に3回